

大草谷津田いきものの里 自然観察会

ムシは花の大事なお友だち

小川洋子（八千代市）

日 時：2016年4月17日（日）10:30～12:00 天候：曇りのち小雨

参加者：14名（大人8名、子ども6名）

担当指導員：晝間初枝、小川洋子

前日の予報は荒れ模様とのことで、天気が心配されたが、雨は降らず予定通り実施できた。この時期に虫が見られるかは、天候に大いに左右される。あいにくの強風に曇天では、どのくらい虫が見られるだろうか気がかりだった。幸い気温は20度を超え虫たちは姿を現してくれた。

観察会は駐車場の隅にたくさん咲いているセイヨウタンポポとそこに来る虫たちの観察から始まった。ハチやアブの仲間、ヤブキリの幼虫などが花を訪れてくる。数が多いとは言えないが、虫たちが忙しそうに花々を行き来する様子が見られた。広場のドウダンツツジは白い花をたくさんつけてちょうど見ごろ。下向きに咲いているこの花にはセイヨウミツバチやコマルハナバチなどが潜り込むようにして蜜を吸っていた。林内のムラサキケマンには同じようにハチやアブの仲間が吸蜜をしに来ていた。虫が狭い入口から進入して蜜を吸うと体に花粉が付き受粉を助けてもらう仕組みになっている。虫がそれほど多くない林内に咲いているにしてはタネがたくさんできている。この花は虫だけを当てにせず自家受粉もしてタネを作る工夫をしていることを説明した。

暗い林内から開けた谷津沿いの道に出た。谷津に大小二つのウラシマソウの花が並んで咲いていた。大きい方が雌花、小さい方が雄花だ。雄花のつけねには小さな隙間があるが大きな雌花のつけねはピタッと閉じて隙間がない。どうしてだろうか。そこで「はめられたキノコバエ」という紙芝居を見てもらった。ウラシマソウが受粉するにはキノコバエの「協力」が必要だ。ウラシマソウは彼らの好きな匂いでキノコバエを誘う。匂いにつられて雄性花に入り込み餌を探して飛び回るうちに花粉が体に付着する。雄性花の隙間から脱出したキノコバエが雌性花に侵入すると餌どころか出口もない、出口を探して苞内を飛び回り雌花を受粉させるが脱出できず死んでしまう、キノコバエにとっては何とも氣の毒な仕組みになっている。紙芝居でこの仕組みを楽しく理解してもらえた。日当たりの良い林縁に咲いていたカントウタンポポと駐車場のセイヨウタンポポとの違いを知り、タネをつけるためには虫の媒介が必要なこともわかつてもらえた。オオイヌノフグリは、朝開き花粉の媒介者の虫が来ない時は、夕方自家受粉する花の構造を観察、理解できた。

この観察会で、多くの花がタネを作るとき虫の協力が必要で、そのため花は甘い蜜で虫を誘い、もしくは蜜があるように惑わせて花粉を運ばせることまでする。そんな自然の巧妙な仕組みを観察し、理解してもらった。

感想では、大人は「新しいことを知る楽しみを感じた」「ウラシマソウの仕組みに驚いた」「今まで気が付かなかったものに目がいった」、子供はシュレーゲルアオガエルの卵塊、オタマジャクシ、成体を見、鳴き声も聞けたことが印象に残ったようだった。